

## 急速に進化する再生医療と「救世主兄弟」の問題

再生医療技術は世界各地で驚異の治療を実現しつつあり、その現状と問題点を取り上げた番組「人体“操作”～再生医療の光と影～」を見た。

ある細胞に変化するようという指示を受けると特定の細胞に分化する能力を持つ細胞は幹細胞で、その中でも、人体のどの部位、臓器の組織にも分化することができ、増殖能力も高いことから万能細胞と呼ばれるのがES細胞（Embryonic Stem Cell：胚性幹細胞）で、成人からは成体幹細胞、胎児からは胚生殖細胞を採り出すことができるのか。

番組では、粉を降りかけると切断された指が再生する事例、お腹の脂肪から採取した幹細胞を注射すると顔のシワが消えるなどの整形美容への応用の事例、豚の体内でヒトの肝臓が作られる実験事例、若い頃の幹細胞を冷凍保存して将来の病気時の再生医療に備えるバンクが繁盛している事例、等々。

再生医療の中でも急速に進むのが生殖医療との組み合わせ。

子どもの難病を治すために、体外受精によって受精卵を複数作り、姉と遺伝子が適合するものだけを選び出して妊娠・出産し、その子の幹細胞が採取されて難病の姉に移植された家族、医師に密着取材した事例もあった。

こうして作られる子は「救世主兄弟」と呼ばれ、米国では既に200人以上生まれているとか。

兄姉の疾患を治すためにサイボーグ的に生を受けた「救世主兄弟」の意志尊重、人権、尊厳はどうなるのだろうか。

番組の中でも倫理的側面からの再生医療の活用について、英国では再生医療や生殖医療の研究に厳しい条件を課した法整備、米国では医師、家族の良心に任せる現状、日本ではオープンに議論されていない実情についても取材されていた。

倫理的な側面については、既に当HPで何度か触れた（HP「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅰ）2005.3.2.「生命は授かるもの？選別して作るもの？」、HP「雑学BN」のマスコミ等コメント関係（Ⅱ）、2005.4.10.「胎児の細胞利用の最先端医療と倫理問題」、等々）ことがあるので参照いただきたい。

2006年に世界で初めて日本の科学者によりマウスの線維芽細胞から人工多能性幹細胞（iES細胞）が作られ、再生医療の驚異的な進化が予想されるだけに、その応用について、日本でも倫理面との兼ね合いの議論が早急に始められることを望むばかりである。